

ムラブリ語の音節とソノリティ階層

伊藤雄馬 (日本学術振興会・東京外国語大学)
yuma.i.86@gmail.com

1 はじめに

ムラブリ語 (オーストロアジア語族クム語派、タイ・ラオス) の音節は、主音節 (major syllable) と副音節 (minor syllable) に分けて記述されてきた (Rischel 1995、伊藤 2014、Bätscher 2015)。この記述方法は東南アジア地域の言語記述、特にオーストロアジア語族の記述によく見られる (cf. Jenny & Sidwell 2015)。ムラブリ語の場合、例 1 の下線部分が副音節となる。

- (1) hm.taʔ “tail” (Rischel 1995: 261)
kl.duuh “uvula” (Rischel 1995: 276)
tr.nək “hummer” (Rischel 1995: 324)

主音節は母音が音節核を担い、単独で現れうる。一方、副音節は子音が音節核を担い、必ず主音節に先行する。それぞれの音節の特徴を表 1 にまとめる。

表 1: 主音節と副音節

	音節核	現れる環境
主音節	母音	自由
副音節	子音	主音節の前

伊藤 (2014: 43) では、主音節と副音節の特徴を踏まえ、ムラブリ語の音節テンプレートを図 1 のように提示し、主音節と副音節の各スロットに入る子音を表 2、3 のようにまとめている。なお表にある阻害音とは、閉鎖音と摩擦音の両方を含む自然類である。音素目録は付録を参照されたい。

$$\overbrace{C_{-2}C_{-1}}^{(副音節)} \overbrace{C_1(C_2)(C_3)V(C)}^{主音節}$$

図 1: 伊藤 (2014: 43) の音節構造テンプレート (一部改変)

表 2: 主音節の頭子音連続の例 (伊藤 2014: 47 より一部改変)

C ₁	C ₂	C ₃	例
阻害音	震え音	-	preʔ 「トウガラシ」
阻害音	鼻音	-	hmeʔ 「新しい」
阻害音	側面音	-	pleʔ 「実」
阻害音	-	接近音	pye 「トカゲの一種」
鼻音	震え音	-	mrek 「絞る」
鼻音	側面音	-	mleʔ 「人」
鼻音	-	接近音	myɣ 「妻」
阻害音	震え音	接近音	grwɛc 「爪」
阻害音	側面音	接近音	klwen 「方向」

表 3: 副音節 (伊藤 2014: 47 より一部改変)

C ₋₂	C ₋₁	例
阻害音	鼻音	sm.bəp 「口」
震え音	鼻音	rm.bah 「側面」
阻害音	震え音	kr.poʔ 「稲光」
阻害音	側面音	kl.muy 「毛」

ここまでの図や表を見て分かるように、ムラブリ語の音節にまつわる記述は煩雑であり、より簡潔な記述方法が求められてきた。

本稿では、「副音節」を子音連続として再解釈し、また接中辞 (infix) の振る舞いを観察することによって、音節をより簡潔に記述する方法を提案する。また、この議論から明らかとなるムラブリ語のソノリティ階層の特徴についても論じる。

2 「副音節」の再解釈

ムラブリ語の語彙データベースである伊藤 (2017) から、「副音節」を含む形式を 63 個抽出した。これら「副音節」を子音連続として再解釈し、分類したのが以下の表 4 である。

表 4: 「副音節」を含む形式

子音連続数	数	例
CC-	0	
CCC-	61	smbep 「口」、 rmbah 「側面」、 bnliq 「青系の色」、 prpip 「(間口が) 広い」、 sŋker 「爪」、 srbok 「蹄」、 srkeŋ 「羽; 鶏」、 srleŋ 「壁」、 srmal 「魂」、 srbot 「歌う」、 crluh 「差し込む」、 drmoʔ 「イタチの一種」、 drt^haq 「竹の一種」、 gmtak 「舌打ちする」、 kndul 「尻」、 gnre 「スープ」、 krlaj 「足首、手首」、 krwec 「指」、 hndaʔ 「薄い」、 hntaʔ 「尾」、 hnryʔ 「成人女性」、 hŋkok 「銃」、 hŋkeʔ 「薪: ダニ」、 hŋgik 「かぼちゃ」、 hrlah 「捌く」、 hrlig 「忘れる」、 hrlɛʔ 「笑う」、 hrloj 「流れる」、 ɟnrak 「櫛」、 ɟrmuuk 「嫌う」、 kldul 「太い」、 kldul 「切り株」、 klkil 「膝」、 klcol 「肘」、 klmuj 「毛」、 kndij 「臍」、 kndɔʔ 「屋根」、 krbol 「埃」、 krlap 「又木」、 krpoʔ 「稲光」、 krpel 「とんぼ」、 krwac 「箒」、 krwec 「引っ掻く」、 krwen 「方向」、 lmbaʔ 「牛」、 lmjɔr 「蜂の一種」、 pmpo 「象」、 prɟar 「磨く」、 prluh 「唸る」、 ɾɟgap 「顎」、 t^hldil 「夕闇」、 t^hlkal 「白髪」、 t^hrbeʔ 「羊」、 trlak 「傷」、 trlam pam 「苔」、 trlay 「鷹」、 trloh 「鍋」、 trluh 「竹の一種」、 trnap 「大きい」、 trnek 「鎚」、 trnuj 「白」、 krkrwec 「引っ掻く」、 bmbwaj 「蜘蛛」
CCCC-	2	
CCCCC-	0	
計	63	

「副音節」を含むとされる形式の約 97% (61/63) が 3 子音連続であることが分かった。4 子音連続は 2 例のみで、どちらも重複が関係している (**krkrwec** 「引っ掻く」、**bmbwaj** 「蜘蛛」: 下線部が重複部分)。加えて、「副音節」とされる形式には、2 子音連続と 5 子音連続は存在しないことも明らかになった。5 子音連続については、伊藤 (2017) の全ての語彙の中においても観察されなかった。

つまり、「副音節」を含む形式は (重複を含む例を除けば) 全て 3 子音連続であることが分かる。

3 接中辞の振る舞い

ムラブリ語には接中辞が存在する。そのひとつに**-rn-**がある。この接中辞は動詞について、その動詞に関連する名詞を派生させる。この接中辞は、いくつか異形態を持つ。その分布は、語根の頭子音 (onset) によって予測可能である (伊藤 2014: 57, Bächtler 2015: 1009)。例 (2) を見られたい。頭子音単独の場合、**-rn-**が頭子音の後に挿入される。震え音を含む子音連続の場合、**-n-**が子音連続の間に挿入される。それ以外の子音連続の場合、**-r-**が子音連続の間に挿入される。なお、3子音連続に接中辞が挿入される例は、観察されていない。

- (2) **t-rn-ek** 「鎚」 vs. **tek** 「叩く」
 ɟ-n-rak 「櫛」 vs. **ɟrak** 「髪を梳く」
 k-r-wac 「箒」 vs. **kwac** 「掃く」

注目したいのは、この接中辞によって派生した形式は、語根の頭子音の数に関わらず、必ず3子音連続になる点である。この観察は「副音節」を含む形式が全て3子音連続であったことと符合する。

4 音節構造の再モデル化

以上までの議論でわかったことをまとめる。

- (3) a. 「副音節」を含む形式の約97%が3子音連続
 b. 4子音連続は、重複が関与した2例のみ
 c. 5子音連続は観察されない
 d. 接中辞**-rn-**により派生した形式は、語根の頭子音数に関わらず必ず3子音連続となる

このうち a. と d.、つまり「副音節」を含む形式と接中辞**-rn-**によって派生した形式の全てが3子音連続となる事実は、ムラブリ語において最大頭子音連続は3であることを示唆しているものと考えられる。

- (4) a.+d. 最大頭子音連続は3である

以上から、図1の音節テンプレートをもう一度評価してみる。まず、図1のテンプレートでは、最大子音連続が5子音連続に見える。しかし、実際は5子音連続は観察されず、最大子音連続は3と考えられるため、不適切である。また、そもそも副音節と主音節という二つの種類の音節を想定する根拠がなく、アドホックである。

この問題を解決するために、本稿では新たに図2のような音節テンプレートを提案する。

C(C)(C)V(C)

図2: 本稿の提案する音節テンプレート

図2の音節テンプレートでは、アドホックであった副音節と主音節の区別を廃した。また、3子音連続が最大であることも明確である。なお、重複が関与する場合のみ4子音連続を許す理由は別稿に譲ることとする。

5 ソノリティ階層

ところで、ムラブリ語の2子音連続 (cf. 表2) から、図3のようなソノリティ階層を提示できる。図3では、閉鎖音と摩擦音を阻害音、震え音と側面音を流音としてまとめている。

阻害音<鼻音<流音<接近音<母音

図3: ソノリティ階層

新しい音節テンプレートをもとに、ムラブリ語の語彙を見ていくと、これまで副音節とされてきた形式は、ソノリティ階層に準ずる形式と違反する形式に分けることができる。ソノリティ階層に違反する形式は、表5に示す4通りに限られることが分かった。

表5: ソノリティ階層に違反する形式

阻害音	鼻音	阻害音	smbep	「口」
流音	鼻音	阻害音	rmbah	「側面」
阻害音	流音	阻害音	krpoʔ	「稲光」
阻害音	流音	鼻音	klmuj	「毛」

表5は1節の表3と概ね対応するが、表5は「副音節」の後に続く子音まで含む点で表3よりも優れた一般化だと言える。

従来の分析では、(明示的に述べられてはいなかったものの) ソノリティ配列原理 (Sonority Sequencing Principle) に従って音節を定めていた。そのため、ソノリティ階層に反する部分は「副音節」として音節に認定する必要があった。

本稿の分析では、ムラブリ語の音節がソノリティ階層に違反しうると考える。その結果、「副音節」を認める必要がなくなり、音節構造のテンプレートを単純化できた。加えて、子音連続をソノリティ階層に準ずる音節と違反する音節に分けることで、より簡潔で説明力の高い一般化が行えることが分かった。

5.1 声門閉鎖音を含む子音連続

ソノリティ階層に違反する形式を認めた結果、声門閉鎖音を含む形式の分析に影響を与える。声門閉鎖音を間に含む CV₁CV₂-の形式を見てみる (例5)。これは、V₁ と V₂ の質が常に一致する。

- (5) **baʔaʔ** 「穢れている」
 t^huʔur 「暑い」
 lɔʔɔk 「棘」

つまり、声門閉鎖音の直前の母音 V₁ は予測可能であり、音韻的ではないと解釈できる。ただし、これまでソノリティ階層に反する音節を認めていなかったため、音節構造のテンプレートに従って解釈し、予測可能な母音である V₁ も音韻的であると考えてきた。

本稿ではソノリティ階層に違反する音節をムラブリ語に認めた。つまり、これらの形式もソノリティ階層に違反する音節として記述できる。予測可能な母音は、ソノリティ階層違反の代償で現れると考えられる。よって、音韻的な解釈を以下のように改める。

- (6) **baʔaʔ** → **bʔaʔ** 「穢れている」
 t^huʔur → **t^hʔur** 「暑い」
 lɔʔɔk → **lʔɔk** 「棘」

例 (6) のような形式を、声門閉鎖音を含む 2 子音連続と再解釈した。本節の最初に述べたように、ソノリティ階層は 2 子音連続の観察に基づいて定めてある。声門閉鎖音を含む形式を 2 子音連続と再解釈したため、この解釈はソノリティ階層に影響を与える。つまり、阻害音-声門閉鎖音の連続は、代償の母音が現れることから、ソノリティ階層に違反する子音連続である。そして、声門閉鎖音は、ソノリティ階層において、阻害音から独立して、阻害音よりも低い位置にあると考えられる。

声門閉鎖音<阻害音<鼻音<流音<接近音<母音

図 4: 新しいソノリティ階層

ソノリティ階層について論じた Parker (2002: 225-6) によれば、英語の声門閉鎖音は音響音声学的に共鳴音と阻害音の両方の特徴を持つため、ソノリティ階層内の位置づけが困難であるとしている。それゆえ、声門閉鎖音は、言語によってソノリティ階層内の位置が異なる可能性があり、声門閉鎖音が単独の音素として認められる言語における研究が必要であるとも述べている。

ムラブリ語は声門閉鎖音を単独の音素として持つ (付録参照)。またソノリティ階層内において、声門閉鎖音が阻害音より低い位置にあることが、本節の議論から示せる。声門閉鎖音のソノリティ階層の位置付けにおいて、ムラブリ語は典型的に有意義なデータを提供するものと思われる。

6 分析の応用

本稿の分析が他の言語、特にオーストロアジア語族クム語派の言語に応用できる可能性がある。例えば、クム語 (オーストロアジア語族クム語派) に、3 節で見た接中辞-**rn**-の振る舞いと同じように見える例が散見される。

(7) クム語 (Svantesson 1983: 96-7)

p-rn-aam ‘trap’ vs. **paam** ‘to set a trap’

p-r-lis ‘plectrum’ vs. **plis** ‘to pluck’

Svantesson (1983: 12) はクム語の音節構造に副音節と主音節を区別している。本稿のムラブリ語の分析を応用すれば、その区別なしに音節を記述できる可能性がある。

7 まとめ

本稿の主張を以下にまとめる。

- (8)
- ムラブリ語の音節は、音節核が母音で、最大頭子音連続は 3 である
 - ソノリティ階層に違反する音節を認め、副音節と主音節の区別を廃することができる
 - 声門閉鎖音はムラブリ語のソノリティ階層において、阻害音より低い位置にある
 - 他の言語 (特にオーストロアジア語族クム語派) に本稿の分析が応用できる可能性がある

参考文献

Bätscher, Kevin (2015) “Mlabri.” In Jenny, Mathias & Paul Sidwell (Eds.), *The Handbook of Austroasiatic Languages*, 1003–1030. Leiden, Boston: Brill.

伊藤雄馬 (2014) 「ムラブリ語の文法スケッチ」『地球研言語記述論集』6, 41–72.

伊藤雄馬 (2017) 『ムラブリ語語彙集』未刊行.

Jenny, Mathias & Paul Sidwell (Eds.) (2015) *The Handbook of Austroasiatic Languages*. Leiden, Boston: Brill.

Parker, G. Stephen (2002) *Quantifying the Sonority Hierarchy*. Doctoral dissertation, University of Massachusetts Amherst.

Rischel, Jørgen (1995) *Minor Mlabri: A Hunter-Gatherer Language of Northern Indochina*. Copenhagen: Museum Tusulanum Press.

Svantesson, Jan-Olof (1983) *Kammu Phonology and Morphology*. Lund : CWK Gleerup.

付録

ムラブリ語では、頭子音 (onset) と末子音 (coda) の体系が異なるため、別々に示す。頭子音には 24 の音素を認め、末子音には 14 の音素を認める。

表 6: 頭子音の目録

	両唇	歯茎	硬口蓋	軟口蓋	声門
閉鎖音	p	t	c	k	ʔ
	b	d	ɟ	g	
	p ^h	t ^h		k ^h	
	ɸ	ɸ			
摩擦音		s			h
鼻音	m	n	ɲ	ŋ	
震え音		r			
側面音		l			
接近音	w		j		

表 7: 末子音の目録

	両唇	歯茎	硬口蓋	軟口蓋	声門
閉鎖音	p	t	c	k	ʔ
摩擦音					h
鼻音	m	n	ɲ	ŋ	
震え音		r			
側面音		l			
接近音	w		j		

母音には 10 の音素を認める。母音の長短は弁別的でない。

表 8: 母音の目録

	前舌	後舌/非円唇	後舌/円唇
狭	i	ɯ	u
半狭	e	ɤ	o
半広	ɛ	ʌ	ɔ
広		a	